



『元良親王集』の表現：「入りにし月」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-09-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三木, 麻子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005098">https://doi.org/10.24729/00005098</a>

# 『元良親王集』の表現

——「入りにし月」をめぐる——

三 木 麻 子

平安私家集を解説する時に、勅撰集とは異なる読み様が必要とされるのは当然のことであろう。しかし、和歌の作者自身を三人称的に記述する物語的私家集（注）においてさえ、その世界は個人的な関係のなかに閉ざされていることが多く、記録史料などには現われぬ世界に読者が入り込んでいくことが要求される。このような機会を『元良親王集』（注）において持つことができたので、その際に考察したことを記したい。『元良親王集』に次のような歌がある。（注）

つきのあかき夜おはしたるに、いでてもものなごきこえて、とくいりにければ、みや

よなよなにいづとみしかどはかなくていりにし月といひてやみなん

(一三五)

この部分を素直に読めば、詞書は、

月の明るい夜に元良親王がいらつしゃつたところ、（女は端まで）出てお話を申し申し上げて、すぐに中に入ってしまったので、宮が、

ということ、月の美しい頃（満月の頃であろうか）に、毎夜見ることはできなけれど、満足したと言えないうちにあつた沈むような気がする月の

ように、女も母屋の端まで出てきたことで期待を持ったのにすぐに中に入ってしまったので、もう「やむ」（違うことを期待するのは終わりにする）ことにしようと言っているのである。女を月になぞらえて、「月のようなあなた」と言いたい。しかし、同時に「とく」——「はかなくて」——「いりにし月」は現時点ではどうすることもできない相手であることを示しているので、「月といひて」終わりにしようと言った。それが「つきのあかき夜おはしたるに」と始まる詞書によって強く印象づけられている。

この和歌を含む前後の部分は『大和物語』にも収録されている。『大和物語』百六段がそれで、前の百五段に続き、近江の介平中興（注）の娘を主人公にし、元良親王とのやりとりを、『元良親王集』に載る和歌六首の次に一組の贈答が加わった形でまとめられている。『大和物語』で一連の話として載せられている『元良親王集』の一三三番歌から一三七番歌のうちから、一三五番歌までの部分を、『元良親王集』と比較しつつ紹介してみよう。『大和物語』では、

故兵部卿の宮、この女のかかること、まだしかりける時、よばひたまひけり。親王、

萩の葉のそよぐことにぞ恨みつる風にうつりてつらき心を

① 元良親王集・一三三

これも、おなじ宮、

あさくこそ人は見るらめ関川の絶ゆる心はあらじとぞ思ふ

② 元良親王集・一三三

女、返し、

関川の岩間をくぐるみづあさみ絶えぬべくのみ見ゆる心を

③ 元良親王集・一三四

かくて、いでても聞えなどすれど、あはでのみありければ、親王、おはしましたりけるに、月のいとあかりければ、よみたまひける。

夜な夜なにいつと見しかどはかなくて入りにし月といひてやみなむ

④ 元良親王集・一三五

とのたまひけり。(後略)

とあり、はじめは元良親王に①「つらき心」を恨まれ、②「絶ゆる心はあらじ」と言い寄られても、③「絶えぬべくのみ見ゆる」とつきはなす女は、そもそも「かかること、まだしかりける時」と紹介されている。「かかる」とは百五段を承ける言葉であるが、百五段に語られる中興の娘は「もののけにわづらひて」、浄蔵大徳に祈禱してもらっていた時に「人とかくいひけり」という浄蔵大徳との恋愛沙汰があつて、「この女にはなくなかしづきて、みこたち、上達部よはひたまへど、帝に奉らむとてあはせざりけれど、このこといできにければ、親も見ずなりにけり」と親にも見放される運命にある。①「萩の葉のそよぐごと」にぞ恨みつる風にうつりてつらき心」という親王の和歌も、萩の葉のそよぐごとに、いつもお恨みしていたことよ、風に葉がそよぐよまづに、男になびいてつれないあなたのお心を。

と、風を他の男になぞらえて、風が吹けばその度ごとにそよぐ萩の葉のよう、いつも別の男に心を移して元良親王には冷たくする浮気な中興の娘の姿

を伝えている。『新編日本古典文学全集』の頭注に、百六段について「はじめ

元良親王がいいよつたころは、女が逢わないでそのまま帰すことがあつたが、女が積極的になつたころは、親王はあまり来なくなつてしまつた、ということ

をいつている……」とあるが、中興の娘が冷淡な態度を取っている部分が『元良親王集』の一三三番歌から一三七番歌に当たるのである。のちに立場が

逆転する部分の贈答は「となむ。また、この女」として続いているのに、『大和物語』にしか見えない。一体に『大和物語』の作者の人物造形は、中興の

娘に対して好意的とは言えないようである。元良親王(寛平二年へ八九〇) 天慶六年へ九四三)の周辺でまとめられたと考えられる『元良親王集』と、

成立は「天曆五、六年(九五二、二)ころを上限とし、可能性として円融朝あたりを下限と考える」(『新編日本古典文学全集』解説)とされる『大和物

語』とは、その影響関係について諸論があるが、木船重昭氏が指摘されるように、当該部分に関しては、元良親王の家集もしくはその歌稿などを資料として百六段がつけられたと考えるのが、自然であると思われる。

『元良親王集』では、中興の娘は二三番歌の詞書に見える。そして「また」と続けられる一三三、四番の贈答も中興の娘とのやりとりになるだろう。

あふみのすけなかがむすめども、かたちよく、こころたかしとき

きたまひて、つかはしける

萩の葉のそよぐごとにぞうらみつる風にかへしてつらき心を (一三三)

また

あさくこそ人はみるらめせき水の絶ゆる心はあらじとぞ思ふ (一三三)

かへし、女

関川のいしまをくぐる水をあさみ絶えぬべくのみ見ゆる心を (一三四) 「かたちよく、こころたかし」と評判の中興の娘たちは、后にこそふさわ

しいと言つてよい。その理解が『大和物語』百五段の「帝に奉らむとて（他の男に）あはせざり」の記述につながつたと思われるのである。また、元良親王の二三番歌の第四句は「風にかへして」とある。萩の葉がそよぐたびに親王が恨みに思つたのは、女が、風に葉を裏返す萩のように、決して表を見せない、親王（男）には見向きもしない「こころたかさ」なのである。『大和物語』の「風にうつりて」（男が言い寄ることになびいていく）とは正反對の女の態度である。次の二三三、四番のやりとりは『大和物語』と同じ形であるが、男の誠意の誓いである「絶ゆる心はあらじ」を「絶えぬべくのみ見ゆる」といなししていくのは、ここでは恋愛のはじまりの常道と理解される。

さて、これに続く二三五番は冒頭に引用した通りであるが、『元良親王集』を読む限り、中興の娘とする必然は全くない。『大和物語』では「かくて、いででの聞えなどすれど、あはでのみありければ」という言葉によつて繋がれていたのであるが、二三五番歌の「よなよなにいづとみしかどはかなくていりにし月といひてやみなん」の初句「よなよなに」までも女の行為と解釈すると、『大和物語』のように書かざるを得なくなつてしまふのである。期待させながら逢ふことまではしない女の態度を、移り気で男をじらす女と造形しているからである。『元良親王集』のように、二三五番歌は月と女のイメージを重ねるところに趣向があると解さない限り、『大和物語』の文章は致し方ないことかもしれないが、この点でも、和歌の草稿に対する『大和物語』の作者の作や『元良親王集』の編纂者との理解度の差が見えるようである。

## 二

ところで、『元良親王集』に登場する女たちは、「女八の宮」「女宮」「この宮」

などとして記される、北の方であつた修子内親王をはじめ、恋愛の相手として有名な京極御息所（藤原時平娘、婁子）や桂の宮（全子内親王）など、それと特定できる人はかりでなく、通称を示されるものの特定できない女や、単に「女」としか記されないものが多数を数える。贈答の相手として記されているのは、他に「監の命婦」・「一条藏人（一条君）」・「民部の御」・「いはや君」・「御をば、おほる（おひね）の大納言の北の方」・「閑院大君・中君・三君」・「むらこ」・「山の井の君」・「承香殿の中納言の君」・「昇大納言の御娘」・「修理の君」・「兼茂の娘兵衛」・「御匣殿」・「近江の介中興の娘」・「としこ」・「近衛御門の君」・「兼茂の宰相の娘」・「右近」・「三条右大臣の御娘」などで、職名や住居に拠る呼び名で書かれているが、この中で注目したいのは「山の井の君」である。

「山の井の君」は『元良親王集』では（一）八八、九番、（二）一一五、六番、（三）一六一番にその詠が見え、『後撰集』にも「山の井の君」に贈る説人不知歌が載る。

まず、『元良親王集』（一）では、次のようにある。

山の井のきみにすみたまうて、ひさしくありて、みやにまゐりて、  
よふけてまかりてければ、「くらくはいかが」とのたまうければ、女  
暗しともたどられざりきいにしへを思ひいでてし帰りしかは（八八）  
おくりのひとにつけてきこえたりけり

帰ってくる袖もぬるるをたまさかにあぶくま川の水にやあるらん（八九）  
元良親王が山の井の君に「すみたまうて、ひさしくありて」とあるので、夫婦関係を結んだものの、絶えて長い間経つてから女は宮邸に呼ばれるという扱ひを受けている。八八番歌はわかりにくいが、

暗い夜道を普通は手探りでたどりたどり帰るものでしょうが、道が暗いといつても、たどるようなこともできなかった、今よりは幸せだった昔

のことを思い出して、(泣きながら)帰つてきましたので。

と、「暗くはいかが(暗い道を帰るのはどうか)」と尋ねた親王の言葉に、暗い道を帰るつらさよりつらい思いをしなからよう帰ったという思いの和歌であるうし、八九番歌も「たまさかに逢ふ」その阿武隈川の水に袖が濡れたのは、別れの悲しみとともに「たまさか」が涙の理由であることを訴えている。また、(2)では、

山の井のきみのいへのまへをおはすとて、かへでのみぢのいとこ  
きをいれたまへりければ

おもひいでとふにはあらじあきはつる色のかぎりをみするなりけり

(一一五)

又、ほどへて「とひたまはず」とうらみて

山の井にすむとわが名はたちしかとふ人かげもみえずもあるかな

(一一六)

と、宮が「山の井のきみのいへのまへをおはす」とあつて、いわゆる前渡りをされた時の女の詠で、「あなたは厭き果ててしまったその状態を、楓の紅葉でみせているでしょう」とあるし、また後には、「とひたまはず」と恨んで、和歌を贈ることもなる。(3)でも、

たえはて給ひぬとみて、山の井の君

山の井のたえはてぬともみゆるかな浅きをだにも思ふころに(一一六一)とあるので、いよいよ絶え果ててしまった宮に和歌を贈っている。この五首はすべて女の詠なのである。『元良親王集』に収められる歌で、親王への返歌として女の詠歌が載るといふのは自然なことであるうが、親王の和歌を載せないまま、女の歌だけが載せられるといふのはなぜか。また確かに、浮気な元良親王ではあるが、山の井の君を重んじた態度が見られないまま五首の和

歌が詠まれている、その状態をそっくり示すのはなぜか。和歌表現という点から考えれば、そこになんらかの趣向、評価すべき点が認められるなどの理由もあるものと思われる。それがこの場合は「山の井の君」という名にあるのではないかと考えるのである。

『後撰集』雑二の「山の井のきみにつかはしける」という詞書で載せられる読人不知歌、

おとにのみききてはやまじあさくともいざくみみてん山の井の水

(一一六五)

の山の井の君には男の方が「いざくみ見てん」と言うので、『元良親王集』に登場する女と同一人物であるか否かはわからないが、「山の井の君」と呼ばれる女に、「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」(万葉集・卷十六・三八〇七、古今集・仮名序書入れ注、下句「浅くは人を思ふものは」という古歌の歌詞によって「山の井の君だから、心浅い(情が薄い)ということがあつても、さあ、汲んでみよう、一度、逢つてみよう」と言ったのであろう。「山の井の君」と呼ばれたのは、もともとは「山の井殿」と呼ばれる邸宅に住むためであらうが、<sup>注</sup>呼称であるのに、それが女の本質であるか確かめよう、というのには、有名な「名にしおはばいざ事とはむ宮ごどり」(古今集・羈旅・四一一・在原業平)と同じ発想である。

『元良親王集』の場合も、(2)の「一六番歌で」とふ人かげもみえずもあるかな」といふのは、先の古歌とともにそれに擬った、

山の井の浅き心もおもはぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ

(古今集・恋五・七六四・読人不知)

の「浅い心で思っているのではないのに、面影ばかりみえて、実際のあなたは来ない」という和歌をも踏まえている。

山の井に住むという評判が立つたけれども（だから心が浅いという悪い名まで立つたのかも知れないが）、それならば私を訪れる影くらしい映つてくれてもよいのに、それさえ見えないことよ。

というのである。また、(3)の「一六一番歌も、

山の井と呼ばれた私に通うあなたも、山の井のように絶え果てたと見えることです。山の井というのなら、せめて浅い心だけでもかけて欲しいと思つ私の心に対して。

と、あくまで「山の井の浅き心」に寄せて、親王の事までも詠んでいるのである。これを「山の井の君」という名を和歌に投影した読みぶりを評価したものと、一方で元良親王の態度、姿勢も心浅い女に対してのものであるから、と捉えれば、山の井の君の詠を五首採用した編纂者の態度も首肯できるところである。ただし、それが三ヶ所に分かれて置かれている点などに、ひとつの歌集作品としては未整理な点も感じられる。

ともかくも、人の名に掛けた和歌というのは、和歌の趣向と成りえていたと思われる。しかし、それは『元良親王集』ばかりのことではなく、近い時代の他の私家集、例えば、『一条摂政御集』にもみえる。ここには「のべ」と呼ばれる女の童が登場して、

ものえんありて、このおきな、うちわたりなりける人に、ものいひけり、のべといひけるわらはつかひけるひとのもとに、ひるよりちぎりけれど、女はえしらで、ただのべにのみあひてあるに

しる人もあらじにかへるくすの葉のあきはてがたののべやしるらん

まつむしのこゑもきこえぬのべにくる人もあらじによさへふけにき

(一一一)

(一一二)

またのとし、この「べ」がしにければ

白露はむすびやするとはなすすきとふべきのべも見えぬ秋かな (一一三)

これにてぞなくなりけりとはしりける、そのをりはいとをかしとおもひけることどももありけれど、ことなることなきひとのうへはみなわすれにけり

とある。「のべ」という童を使う女と約束したのに、女は知らないで「のべ」とだけ結ばれて、と解されている場面である。その状況を「のべやしるらん」「のべにくる」という言葉で表わそうとし、「のべ」が死んだ時、女の歌にも「とふべきのべも見えぬ」とあつて、これによつて亡くなったと知つたのだと「のべ」の挿話が終わる。女童の名が「のべ」でなければ交わされなかつたやとりである。

また、「信明集」にも見える、

そでといふ女つかひたる人に、その女につけていふ

人しれぬわが物思ひの涙をば袖につけてぞ見すべかりける (一一三七)

は、『後撰集』の恋三・七二二番に読人不知歌として収められている。「そで」という女に託した和歌なので、私の涙を衣の袖ならぬ、「そで」に付けてみせるのだというものである。

さらに、名前に心を遣るのは人の名の場合ばかりではないということは、『後撰集』の、

春宮になるといふものもとに、女と物いひけるに、おやの戸をさしてたててゐていりにければ、又のあしたにつかはしける

なるとよりさしいだされし舟よりも我ぞよるべもなき心地せし

藤原滋幹 (恋二・六五二)

をみても理解されるだろう。春宮御所の「鳴る戸」と呼ばれた戸口で女と会っていたのを、親に邪魔されたという状況を詳しく説明しなければ理解されない和歌であるが、そうして、この和歌のおもしろさ（「鳴る戸」を地名の鳴門に掛けて転じていること、激しい潮流に翻弄される舟を自らと比べてみせている）を紹介すべきであると判断されているのである。それはこの時代に、名前に着目した和歌が、たとえば「歌語り」<sup>（通称）</sup>とされるべきものとして興味を引いたということであろう。「古今集」の部立にいれられた物名歌の伝統を思うまでもなく、「呼び名」は絶えず和歌の発想を刺激するものであったのではないだろうか。

さて、ふたたび、『元良親王集』にもどり、山の井の君以外に女の和歌だけが載せられている箇所をみると、次のようになる。

78 / 79 / 83 / 84 / 87 / 90 / 91 · 92 / 93 · 94 / 97 / 98 / 107 · 108 (承香殿の中納言の君) / 117 (修理のくそ) / 119 / 121 (かねもとの娘の兵衛) / 125 / 130 · 131 (監の命婦) / 136 · 137 / 142 (としこ) / 150 / 153 / 166 / 168 / 169

と、いずれも一首または二首で、「女」とだけ記されて載るものがほとんどであるが、その数が多い（呼び名の記されているものは括弧内に示した）。

これらの例が、家集の後半部分に見えるのは、『元良親王集』の編集が次第に雑纂的になっていった可能性も感じられるもの、表現面から評価すべき和歌を取り上げたのだという視点から見ると、

わすれ給うにける女、きよみづにまうであひたてまつりて、宮はしらぬがほにていで給ふに、きこえける  
わたつみにありとそききしきよみづにすめる水にもうきめありけり  
(九七)

つのかくに、たまさかといふところに、しりおき給へる女

てしまなる名をたまさかのたまさかにおもひいでてもあはれといはん

(二六九)

などには、清水で会ったことを「海ではない」澄んだ水にも（海の）浮き海布があつた——清水でも憂き目にあつた」と詠んだり、津の国の玉坂に置かれていた女が「たまさかに」でも、「あはれ（愛しい）」と言つて欲しいと訴えたという機知が見える。特に玉坂の話は、詞書の短さからみても詠作事情よりもまさに「たまさか」の名が焦点であつたのだろう。『忠見集』に

むかしかたらひ侍りて人のとしころあひみぬが、つのかくにたまさか

といふところにあるに、鈴虫のなきけるに

たまさかにけふあひみれど鈴虫は昔ならしし声ぞきこゆる (二四五)

と同様の趣向の例が見えるように、「たまさか」は地名としての名に重ねて、「偶然、たまたま」という意を持つために、詠まれるべき土地の名としてあつたのだと考えられる。これは、まさに、地名と和歌が響き合つて、独立した歌語りになりうる挿話として収められていたのではないだろうか。

### 三

このように物語的私家集の中で、時間の経過による人生の流れを追うよりも、歌語りの挿話を好んで取り上げていく姿勢は、『元良親王集』の冒頭から見えていたものである。

陽成院の一宮もとよしのみこ、いみじきいろごのみにおはしましければ、よにある女の上しときこゆるには、あふにもあはぬにも、文やり歌よみつつやりたまふ、げんの命婦のもとよりかへり給つて

くやくやとまつ夕ぐれと今はとてかへるあしたといづれまさざり (一)

とていでたまへば、ひかへて、女

いまはとてわかるるよりも高砂のまつはまさりてくるしてふなり (二)

いとをかしとおほして、人々に「この返しせよ」とのたまへば

夕ぐれはたのむ心になぐさめつかへるあしたぞわびしかるべき (三)

また、かくも

いまはとて別るるよりも夕ぐれはおほつかなくてまちこそはせめ (四)

これをなん「をかし」とのたまひける

「恋しい人が来るか、来るかと待つ夕暮れと、今はお別れの時といつて帰る朝と、どちらが苦しいものか」という元良親王の問に、「待つことが苦しい」と答えた監の命婦の和歌に興味を持って、いろいろな恋人に同じ問に返歌をさせた。『後撰集』恋一・五一には「藤原かつみ」の返歌が載り、右の三番歌は、その類歌が「本院侍従」の作として、『栄花物語』などに説話化されて見えるように、実際にはもつと多くの返歌が寄せられたのかもしれないが、その中の代表を並べ、さらに、もつとも「をかし」と思われたものをあげるという、和歌の雅の世界に生きる親王像をまず描いてみせている。

またもう一例あげると、『大和物語』で中興の娘の話として百六段にまとめられた、一三六、七番歌もそうであろう。

あなぎをおとしておはしたるをみれば、女の手にてかけり

わすらるる身は我からのあやまちになしてだにこそ思ひたえなめ

(一三七)

とあるかたはらに、かきつけてたてまつる

ゆゆしくもおもほゆるかな人ごとにとまれにける世にこそありけれ

(一三七)

元良親王が女のところを扇を落として行かれたのを見たところ、そこには「親王に忘れられたのは自らの過ちと思つことにして、自分の思いも断つてしまいましよう」という和歌が、女の筆跡で書かれていたという。それで、この女も扇のその横に自分の和歌を書いたというのである。この女の詠(一三七番歌)は、「何というお気の毒なことでしょう、宮様はどんなお相手にもうとまれるような人生をお過ごしなのですね」という親王に同情を寄せるものであるが、これも物語の一場面を切りとつたような内容で、元良親王の和歌は必要とされていないのであった。「私家集」、つまり私の(家の)歌集としてその人の和歌を集めるといふ発想とは異なり、歌語り、それも物語に発展するような場面で「をかし」と評される和歌が詠まれるという、親王の周りに醸し出される雅な世界の描出をめざして、歌稿が編集されているといえるのである。物語的私家集といわれる『伊勢集』などが、冒頭こそ日常を追って、女の半生を描いてゆこうとしているものの、後には屏風歌や歌合歌の集成となつていくことなど比べるとその違いは歴然としている。

さて、和歌を中心とした挿話を重んじ、なおかつ和歌によって作られる雅の世界を表出すべく編集されたと考えた上で、もう一度冒頭に挙げた一首の和歌に戻つて考えてみたい。

つきのあかき夜おはしたるに、いでてもものなときこえて、とくいり

にければ、みや

よなよなにいづとみしかどはかなくていりにし月といひてやみなん

(一三五)

「月の明るい夜に元良親王がいらつしゃつたのに、女は端まで出てお話しして、すぐに入ってしまったので」詠まれた和歌の趣向は、月と女を重ねたことにあるのだが、それだけではないだろう。月は夜ごとに出ることは出る、それ



を見るのだが、その時間ははかなくて、飽かず思つうちに山に入ってしまったのだ、という気持と、女が出てきてくれたと思つてもすぐ中に入ったという行為、それははかない期待だったという気持を重ね、さらに「入りにし月」と女を呼んで女のことを諦めようとしたところが要点ではないだろうか。女を「入りにし月」と呼ぶことがこの和歌の趣向だと言えるのである。

『伊勢物語』八十二段に「あかなくにまだきも月のかくるるか山のはにげていれずもあらなむ」(古今集・雑上・八八四・在原業平にも)、「おしなべて峰もたひらになりなむ山の端なくは月も入らしを」(後撰集・雑三・二二四九・上野宏雄にも)と詠まれた月が、惟喬親王を指していたように、月と人を重ねる事は自然なことである。また「月」は釈教歌の世界でも多く詠まれ、後世「をしへおきていりにし月のなかりせはいかでおもひを西にかけまし」(金葉集・雑下・六三二・肥後)で「入りにし月」は入滅した釈迦を詠んでいるように、「亡くなつた人」のことを言うこともある<sup>(注1)</sup>。しかし、『元良親王集』に近い時代の『輔親集』の、

おほやけ所に、かたらはむとおもふ人のつまどにて物いはむとするが、ひとさわがしとて入りにしかば、つとめて

岩とざしいりにし月の影をだにみるべきひまのあらじとやする (八一)

や、『定頼集』(前田家蔵明王院旧蔵本)の、

中宮御方に、五月八日夜、人人ものいひしに、なかにこれと思ふ人の入りにしかば、つとめて

心にもあらぬ空をぞながめつるいりにし月の影こひしさに (二二〇)  
をみれば、『輔親集』では「物いはむと」した人と、『定頼集』では「これをと思ふ人」と、逢えなくなつてしまった顛末を、それぞれが「入りにしかば、つとめて」と書いて、さらに「入りにし月」は遁れてしまった美しい女の代

名詞となつているのである。そこで、これに先んじる『元良親王集』の中の「いりにし月」も女の呼び名として語られたのだつたと考えられる。それは後に作り物語のなかで、女の登場する場面で詠まれた物の名や和歌の言葉が、女やその巻の呼称として定まっていふことと思ひ合わせれば、ひとつの言葉がひとつの世界を閉じ込めた代名詞として使われていく(例えば本歌取りのような)、その方法を、すでに表現としてここで表わそうとしていたとも言えるだろう。

「山の井の君」のように、「入りにし月」と呼ぶ女の話が語られていく可能性を秘めて、一三五番歌が『元良親王集』に置かれてみるとみておきたい。

(注1) 『元良親王集』の物語性について論じた先行論文に、山口博「元良親王集の物語性」(『平安文学研究』25輯・昭和35年11月)、阿部俊子「元良親王御集の性格」(『学習院女子短期大学紀要』7号・昭和45年2月)、岡部由文「元良親王御集」と「大和物語」(『国学院大学院文学研究科論集』4号・昭和52年3月)などがある。

(注2) 片桐洋一・関西私家集研究会『元良親王集全歌』(近刊予定)。

(注3) 底本は、宮内庁書陵部蔵『元良親王集』(五〇一・二二〇)を用いた。『新編国歌大観』(高橋正治解題)で、

(一) 宮内庁書陵部本 (五〇一・二二〇)

(二) 宮内庁書陵部本 (五〇一・四三三) 系統

と分類され、「両系統それぞれに欠脱があり、相補つてもとの姿を知ることができる」(二)に比べると、(一)で一首の歌であるものが連歌になっている所も二か所あり、その他の本文も古い形をもっている」といわれるものである。底本の意味が通らない場合は(二)の宮

内庁書陵部蔵本(五〇一・四三三)により校訂し、歌番号は「新編国歌大観」番号を付した。濁点、句読点は私に付し、漢字かな表記を改めた場合がある。

(注4) 「大和物語」は高橋正治校注・訳、新編日本古典文学全集「大和物語」(小学館)に拠る。

(注5) (注2) 片桐洋一先生解説参照。

(注6) 木船重昭『元良親王集注釈』(大学堂書店・昭和59年)解説。「大和物語」に先行する、元良親王集の存在を推定させずにはおかない……「大和物語」の編者が資料とした原元良親王集とおほしきものは、現元良親王集とは、かなり形態を異にしていたのであろう」とある。(注1)にあげた論文は、いずれも、「大和物語」を参考にして現「元良親王集」が書かれたとしていた。現在の「元良親王集」には「大和物語」や他の資料により増補された部分もあると考えられる(注2)解説参照。しかし(注1)の山口博氏論文の、「元良親王集」一〇七番、一四二番(「大和物語」と共通する個所全てを含む)が、「大和物語」を始めとする他の資料の影響による物語化であるという説は疑問である。同時代の「大和物語」とは相互に影響を与えあっている姿を伝えていると見たい。

(注7) (注6) 木船氏の注釈ではこの一連を「大和物語」同様に中興の娘との贈答とするが、(注1)の岡部由文氏論文には「14番の歌以降は、その詞書からみる限り、全く異なる相手との間に交された贈答歌の如くも解釈することが可能なのである……別の契機における贈答とみるべきである」という御指摘がある。

(注8) 「山井殿、三条坊門北、京極西」(拾芥抄)。

『元良親王集』の表現

(注9) 平安文学輪読会「一条摂政御集注釈」(塙書房・昭和42年)による。

(注10) 片桐洋一「伊勢物語の研究」(研究篇)(明治書院・昭和43年)、第一篇「歌物語の発生と展開」、第三章「歌語りから歌物語へ——歌物語の成立——」に、「歌語り」を、その人物に仕えている、あるいは仕えていた女房が伝える「噂話」で、ごく限られた人々の間で語られるものとし、あくまで和歌を中心にして伝え語られるものと定義されている。

(注11) 「あさひさす雲井をみてもはかなくて入りにし月のかげぞこひしき」(高倉院昇靈記・九八)など。

\*引用は特に断らない限り、「新編国歌大観」により、「万葉集」には旧国歌大観番号を付した。

(みき あさこ・大谷女子大学非常勤講師)